

# ドウブツメセン

高知工科大学 工学部 社会システム工学科  
1090448 清水貴章

## 設計の原点

檻の中の動物。外から見る人間。そんな人間中心の動物園。

近代の動物園は単なる見世物ではなく、教育・研究施設としての役割を強くもつと考えられている。人間による教育・研究の為に、野生動物を連れてきて生きたまま収蔵する博物館としての性格が強い。

最近では、無柵放養方式や旭山動物園のような混合展示方式で、動物に少しでも野生に近い環境を与え、動物本来の動き・生き様・本能を引き出し、一般客に見せている。

しかし、動物を人工的な檻や柵に入れ、人間が外から見るという人間中心の見方は変わらない。それでは今の動物園が持つ意味である、動物を大切にすること、そこから地球環境のことを考えることは、一般客にあまり伝わらないのではないだろうか。

そこで私はその関係を一度破壊し、人間と動物がこれからどうあるべきなのか人々に伝え、考えさせる動物園を設計する。

## 敷地

敷地は愛媛県砥部町にあるとべ動物園の一部に設定する。とべ動物園は、四国で最大、西日本でも最大級の動物園である。来園者数が比較的多い動物園で、中でも集客の多い敷地北東に位置するアフリカストリート、ゾウストリートで計画することによってより多くの人々に伝わり、考えさせることができるのではないだろうか。

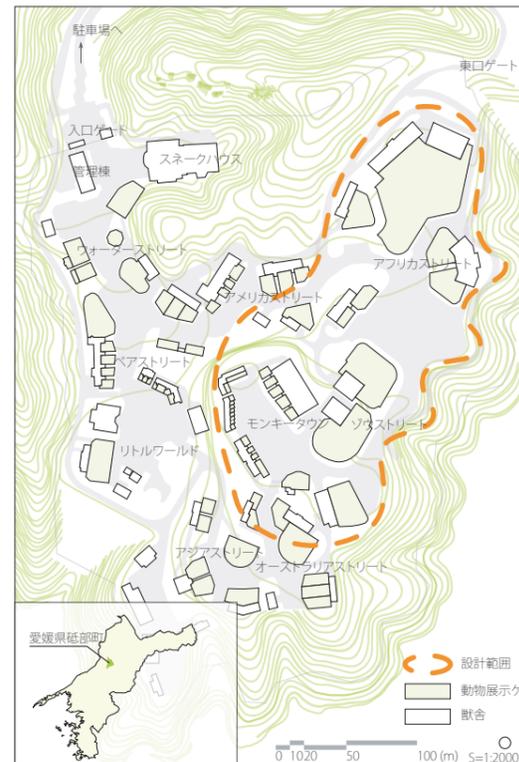
## コンセプト

現状の関係を破壊するために、まず動物を閉じ込めている檻や柵から開放する。開放され、今までよりも広く自然に近い環境で過ごす動物たちがいる中で、人間達が歩くことができる道をつくる。その道には、様々な高さの窓や、頭上にしか窓がない場所、壁が切れて檻で構成されている場所がある。また、動物が自分たちの上や下を通る場所もある。そんな道で様々なシーケンスを体験し、現状の世界へ戻ったときに人間は何を思うだろう。

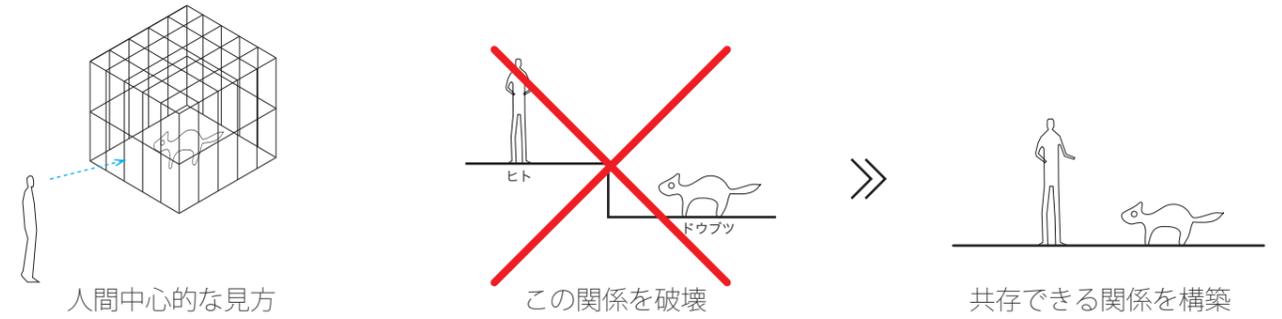
自分たち人間ができること、何が大切か、この動物園から人間の優しさを忘れてはいけないということを伝えたい。

そして、本当の意味で共存でき、いつか人間と動物が平等になれる世界になることを願う。

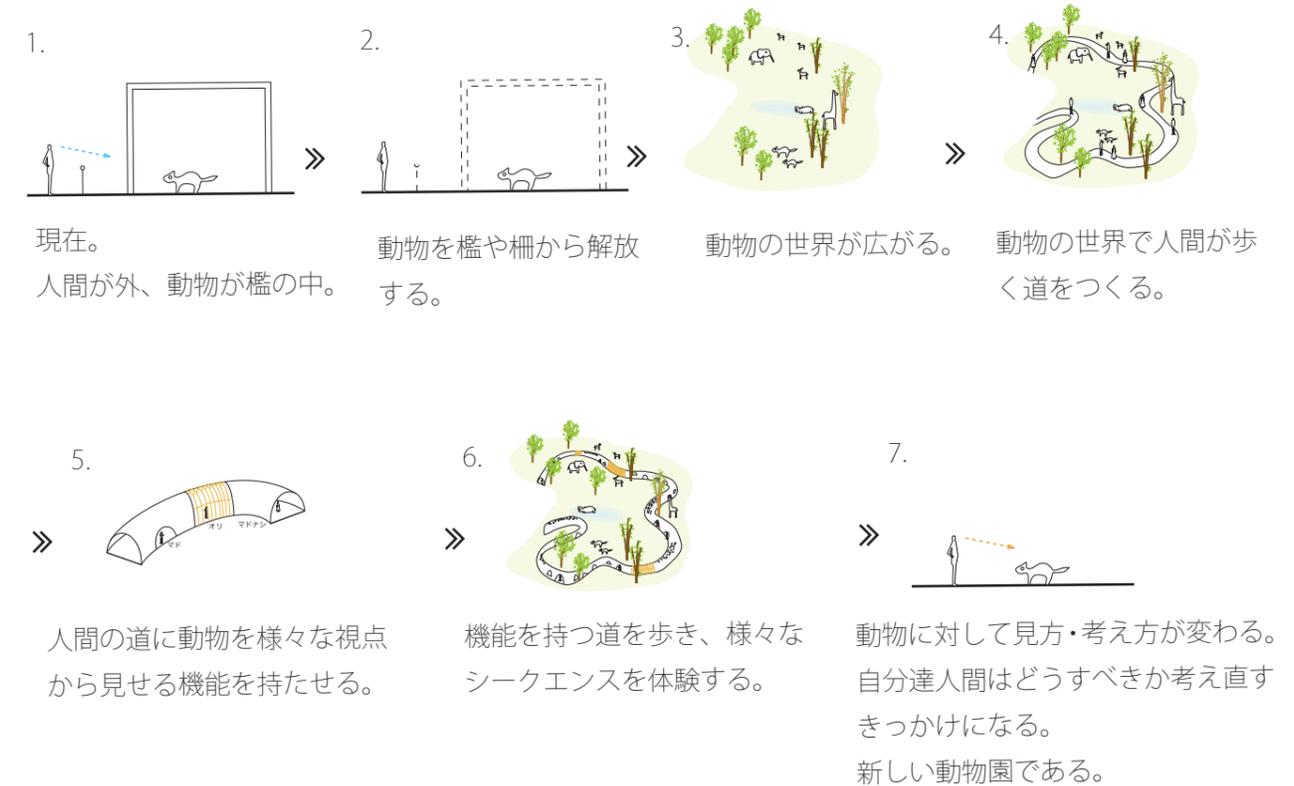
## 選定敷地



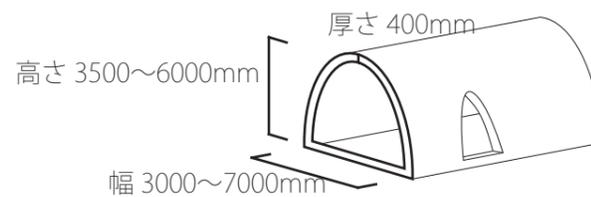
## コンセプトダイアグラム



## 設計手順

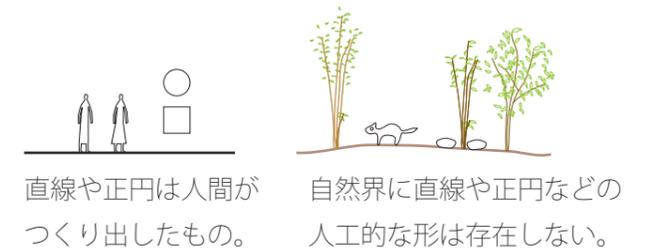


## 構造について



壁厚 400mm で、道をヴォールト状に構成する。RC 造で、配筋によって自由なプランを可能にさせる。

## ヴォールトの形

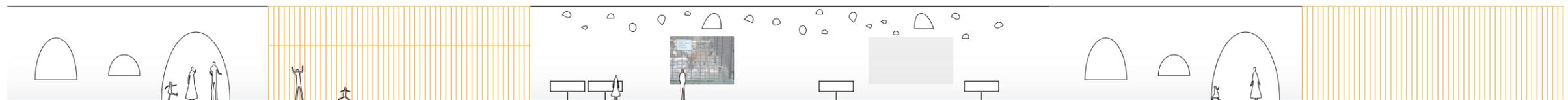


まるで洞窟のような自然に近い形で、ヴォールト状に人間の空間を構成し、人工物としての主張を抑える。



Plan S=1/1000 

空間の流れ



今までと同じように、様々な高さの窓から動物を見つけ、動物を見る。

道歩いていくと壁が切れ、檻が出現する。檻に驚き、檻の中から動物を見る。

さらに歩いていくと頭上には窓が開いておらず、平面的に動物と人間を閉ざす道に入る。そこには動物の情報や、地球環境の情報が公開されており、展示情報に視線がいく。それぞれの動物について様々なことを知る。

歩き出すと、再び窓や檻の空間に入る。最初に動物を見た時と、情報を知ってから動物を見るとは、動物に対する見方が変わる。人間が檻や壁の中から見ている光景は、今の動物の立場に立って見ているということである。